

皆さんは西竹一という人物をご存知でしょうか？

1932年ロスアンゼルス五輪の馬術競技での金メダルリストです。

誰からも愛される人柄で、反日機運の真っ只中にもかかわらず人気を博しますが、終戦真近に行われた硫黄島の戦いでは日本国のために戦い抜き戦死しました。

2006年のクリント・イーストウッド監督の映画「硫黄島からの手紙」では伊原剛志さんが熱演し、負傷したアメリカ兵を助ける人間味あふれる行動に感動した方も多いのではないのでしょうか。1902年7月12日東京麻布にて男爵かつ外交官である父の三男として誕生。

日清戦争後の1898年日本による朝鮮半島支配をロシアに認めさせた父。ローゼン協定を締結し1900年の義和団事件では北京農場を経営し公私共に日本人居留者を庇い敵の襲撃から守るなど外交官として大いに活躍しました。また義和団事件の処理に関しては西太后から厚い信頼を受けたことから中国茶の専売権を与えられ巨万の富を手にした資産家でもありました。そんな父でしたが竹一が10歳の頃に亡くなってしまいます。西竹一が麻布の屋敷や多額な財産、そして男爵位つまりバロンの地位など、全てを相続することになりました。名実ともにバロン西の誕生です。父親と同じく外交官の道を歩んでいた西。しかし、西は外交官とは対極に位置する軍人への道を開拓して行きます。これには学習院院長乃木希典の「華族の子弟はなるべく軍人を志せ」という教えが影響していました。この言葉に感化されて来た西は1917年、一中在籍中に広島陸軍地方4年学校へ転籍し軍人街道を突き進むことになります。

幼年学校3年の時に西は乗馬に出会います。好きこそ物の上手なれとはよく言ったもので馬に乗ることの楽しさを知った西はめきめきと乗馬技術を向上させて行きます。1920年に陸軍士官学校第36期生として入校します。1922年陸軍士官学校の卒業時に西は選択を迫られます。東京大学の2年生時に行われる進学振替のようなものです。しかし、すでに乗馬に魅せられていた西は、馬の神様と呼ばれた馬術家遊佐幸平などから本格的な馬術を学ぶようになります。1924年陸軍士官学校を卒業後、見習い士官として騎兵第一連隊付けとなり同年10月には陸軍騎兵少尉に任官されました。騎兵第一連隊となった西は、さらに乗馬の技術を磨いていきます。西のテクニックの凄さが分かるエピソードがあります。支給された馬と上京し自身の愛車クライスラーの上を飛び越えさせたのです。一歩間違えば馬も西も車もただではすみません。そんな危険な挑戦を成功させ周りを驚嘆させました。

日本馬術競技史上、唯一の金メダル！

日本馬術史上、唯一の金メダリストをご存じでしょうか。

実は、今から90年以上前に開催された戦前のオリンピックでも、「ある一人の日本人のアスリート」が金メダルを獲得しました。競技は馬術。

その伝説的アスリート「バロン西」こと西竹一をテーマに、なぜ彼は戦場に行かざるをえなかったのか、彼が派遣された「硫黄島の戦い」の全貌を詳しく見ながら解説しましょう。

Q1 そもそも「バロン西」こと西竹一はどんな人物ですか？

西竹一は華族(男爵)出身の陸軍騎兵将校です。生まれは東京の麻布こうがいちょう(現在の西麻布2丁目)。学習院から府立一中、陸軍士官学校へと進みます。

「高身長」「美男子」「明るい性格」で、いかにも男爵家育ちといった天真爛漫な人柄は、欧米の社交界でも人気を得ました。

Q2 馬術競技での金メダルは、どのオリンピックですか？

1932年にアメリカで開催された「ロスアンゼルス・オリンピック」です。大会最終日の8月14日、西中尉は愛馬「ウラヌス」と共に馬術大障害飛越、個人に出場し、見事優勝しました。「ウラヌス」は、西がイタリア出張中に2000円という当時としては大金で入手した名馬です。

Q3 なぜその金メダルが、大きな称賛を得たのですか？

当時のオリンピックには、まだスポーツに対する「上流階級」イメージが強く、その中で「優雅さ」の際立つ馬術は、最も人気の高い「花形」種目でした。そのため、馬術は大観衆のメインスタジアムで最終種目として行われ、そこで勝利した西竹一の華麗な勇姿は、人々に「バロン西」の名で称えられました。西竹一の馬術用の長靴は「エルメス」だったそうです。

Q4 「バロン」とはどういう意味ですか？「貴族や華族の爵位で男爵」という意味です。彼は外務大臣なども務めた男爵、西 徳二郎の三男で、単なる愛称ではなく、実際の出自です。

Q5 なぜ「金メダリスト」が、戦場に赴いたのですか？

「バロン西」こと西中佐は、「戦車第26連隊の連隊長」として、23両の戦車を率い1944年6月に硫黄島に派遣されました。当時、オリンピックの金メダリストへの兵役免除といった優遇制度はありません。それ以前に彼は騎兵所属という「超エリートの職業軍人」でした。いかに金メダリストとはいえ、戦地への派遣は避けては通れない道だったのです。硫黄島での「バロン西」は、愛用の鞭を手に乗馬用の長靴を着用し、兵士からの人気も高かったそうです。

Q6 「バロン西」が派遣された硫黄島の戦いとは？

太平洋戦争末期の1945年2月19日から3月26日に、東京都小笠原諸島の硫黄島において日本軍とアメリカ軍によって行われた戦いです。硫黄島を守る「日本軍2万1000」に対し、「アメリカ軍6万1000」と兵力差は圧倒的でした。しかし、日本軍司令官の栗林忠道中将をはじめ、将兵は徹底した「持久戦」でアメリカ軍に対抗し、最後は玉砕しました。

Q7 なぜ硫黄島が戦場になったのですか？ 硫黄島が、マリアナ諸島と日本本土のちょうど中間」に位置していたからです。アメリカはグアム、サイパンなどマリアナ諸島を占領したことで、航続距離が片道2800kmのB29爆撃機による日本本土ほぼ全域への直接爆撃が可能となりました。

ただ、B29を護衛できる長い航続距離を持つ戦闘機はなかったP51護衛戦闘機でも航続距離は片道1300km)ため、硫黄島を占領して、「護衛戦闘機の基地およびB29の不時着場所」として活用できると考えたのです。実際、硫黄島には終戦までに、2200機以上のB29が不時着しました。

Q8 日本軍はどのように迎え撃ったのですか？

最高司令官は「知米派」で知られる栗林忠道陸軍中將でした。栗林中將は戦前にアメリカ留学の経験もあり、アメリカの戦い方を熟知していました。司令部をはじめ、島内すべての施設を地下深くに構築し、更にこれらをトンネルでつなぐ「地下要塞」化の難工事を行いま

した。そして「徹底した持久戦とゲリラ戦」に持ち込み、火力と物量に勝るアメリカ軍に対抗したのです。最後の日本兵が投稿したのは1949年です。

Q9 硫黄島ではアメリカ軍の被害のほうが大きかった」のは本当ですか？

本当です。当初、アメリカの上陸部隊指揮官は「5日で片付ける」と豪語していましたが、実際の戦いは「1か月以上」に及ぶ長期戦となりました。上陸時のアメリカ軍 負傷手術率は90%（ノルマンディ上陸作戦では5%）。最終的に硫黄島の日本軍は玉砕しますが、日本軍の戦死傷者約2万1000人に対し、アメリカ軍の戦死傷者は2万8686人と、日本軍の数字を上回りました。

Q10 硫黄島の住民はどうなったのですか？

栗林中将は1943年6月に硫黄島に着任すると、翌7月に軍属として現地徴用した一部を除き、全島民を内地へ疎開させました。そのため、多くの住人が戦いに巻き込まれることはありませんでした。

Q11「バロン西」はどう戦ったのですか？活躍はしたのですか？

西中佐の率いる戦車連隊は、島の東部の主要陣地に迫る敵の一団を撃破する活躍もみせました。しかし、次第に劣勢となり、彼はその後戦闘中に負傷3月21日に戦死したとされていますが、詳しい最期の様子は分かっていません。ちなみに、この直後「ウラヌス」も主人の後を追うように東京で亡くなっています。

後に彼の死は、アメリカ国内でも多くの人に惜しまれました。

Q12 「バロン西」は、アメリカ兵に「投降」を呼びかけられたようですが？

たしかに、「バロン西」の名を知るアメリカ兵が彼の命を惜しみ、「投降を呼びかけたものの、応じなかった」というのは、今に伝わる有名なエピソードです。ただし、それが事実か否かは不明です。

硫黄島は終始、激戦が続けられ、日米双方の多くの将兵が死傷しています。日本軍に投降を呼びかけるほどの余裕がアメリカ軍にあったとは必ずしも思えません。「投降」の真相は残念ながらよく分かっていません。

戦後、硫黄島は長くアメリカの統治下にありました。日本にようやく返還されたのは1968年（昭和43年）6月26日です。現在、島には海上自衛隊の航空基地が設置されていますが、旧島民の帰還は果たされず、自衛隊員以外の立ち入りは原則禁止。戦後70年以上が経過したものの、島にはまだ無数の不発弾と1万3000柱を超える兵士の遺骨が残されていると言われています。